

For your Lifework

「生物」「生命」を研究・育成する施設から
読者の皆さんへのメッセージ



公益財団法人 山階鳥類研究所 [Vol.2]

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115
TEL: 04-7182-1101 URL: <http://www.yamashina.or.jp/>

文● 出口 智広 (山階鳥類研究所 保全研究室)

絶滅危惧種を守る仕事

私は、山階鳥類研究所に入所して12年間、小笠原諸島におけるアホウドリの保全活動を担当してきました。本コラムでは、これまでの経験をもとに、多くの絶滅危惧種の保全活動に欠かせない四つの努力について紹介します。

まず一つ目は事前準備と現場の運営です。私たちの活動は、噴火の危険性が常にある現繁殖地の伊豆鳥島から、戦前まで繁殖地だった小笠原諸島の無人島に幼いヒナを運び、現地で巣立ちまで育てることによって、安全な集団繁殖地の早期復活を促すというものです。この活動は、アホウドリが生まれ育った場所に戻り繁殖する特性を持つため実施に至った訳ですが、ヒナはいつ場所を記憶する？ どんな餌が適切？ 人が育てて刷り込みは大丈夫？ など細部についてはほとんどわかっていませんでした。そこで、実際に活動を始めるとの3年間は文献から必要情報を集めたり、近縁種を使った試験飼育のために費やしました。また、これらの準備によってある程度の確証が得られても、実際の現場では、ヒナを育て上げるために、数名との無人島でのキャンプ生活を毎年4ヶ月間続ける必要がありました。それには、さまざまな協力者を集め、一つの目的のために力を注ぐ環境作りが必要となります。

次に利害関係者との調整も活動の継続にはとても重要です。海洋島という独特な自然環境を有する小笠原諸島では、私たちの活動が始まる以前から、さまざまな調査保全活動が進められており、これらに対する十分な配慮が不可欠です。そして、小笠原は世界自然遺産への登録もあって、国や地域の行政によってさまざ

まな管理が施されており、活動の実施に際しては多くの許可の取得が求められます。また、私たちの活動は、アホウドリが米国の絶滅危惧種の指定を受けて始まった、国際的な保全プロジェクトの一環としておこなわれてきました。そのため、渡り鳥であるアホウドリが非繁殖期に過ごすベーリング海やアラスカ湾において、近年発生が増えている漁業中の混獲（漁獲対象種と一緒に誤って捕獲されること）を防ぐ取り組みへの協力も大切な仕事です。

三つ目は普及啓発に対する努力です。アホウドリは繁殖開始が5～8歳、寿命が20年以上に達します。そのため、彼らの集団繁殖地の復活にはとても長い年月を要し、それには小笠原に暮らす地元住民の理解と協力が不可欠です。そこで、私たちは説明会や企画展を定期的に行ったり、メディアの取材に協力することで、活動の経過に関心を持ってもらえるよう心がけてきました。また、地元の小学校では「総合的な学習」の時間を利用して、無人島での活動に参加経験のある地域住民が核となり、アホウドリに関する授業を年に6～7回おこなう場も作っています。さらに、私は、本活動が同じような危機を抱える多くの動物を守る取り組みのお手本になることを目指しており、これまでの成果を英文学術雑誌において定期的に発表することも心がけています。

そして、最後が資金獲得に対する努力です。とても寂しいことですが、私たちの活動のように将来的な不安を払拭するための保全活動に対して、すべてを丸抱えするような多額の支援は、今の日本の行政に期待することはできません。そのため、私たちの活動の場合、年間数千万円の必要資金の半分に相当する助成金を米政府から取り付け、残りの半分を日本の行政や民間からの支援で賄いながら進めてきました。それには、先方の立場によって求めるものが異なることへの正しい理解が大切であり、得られた成果を「見える形」でこまめに出し続ける努力も必要です。

私はこれら四つに等しく努力を傾けることで、アホウドリの保全活動を長く続けられる機会に恵まれました。おかげで、自分の手で育てたアホウドリが小笠原で繁殖し、その子が繁殖のために再び小笠原に現れる様子まで確認することができました。若い世代の方には、多くの責任を背負うことで得られる支援をもとに、大きな夢を皆で叶える喜びを伝えていきたいと思っています。